

しあわせクラブ

森野 水琴

満月の夜、男が道を歩いてみると、雪のように白い肌の女性に出会った。

女はしあわせクラブの月例会の案内を男に手渡す。満月の夜に集まる会合らしい。女に見とれながら、いざなわれるがままに月例会の会場に着いた。

今夜のように月見にふさわしい夜は、屋外に卓を並べて、満月を愛でるのが定例らしい。

すでに何人も参加者がいて、女の案内する卓に二人で座った。

満月と女を見比べながら、女が月からの使者のようだと男には見えてきた。

何を話すわけでもないのに、幸せな気分になる。

満月のたびに女と逢える喜びに、男は微笑みながら、しあわせクラブに入会した。

しあわせな日々が始まる。